

石 すとーん・さーくる

No.106

発行 新潟県石仏の会(代表 星野 紀子)

2019年12月20日 発行

事務局 T945-0837 柏崎市三島町16-2 渡邊三四一 電話0257-22-1941

ホームページ <http://niigata-sekibutu.voxx.jp>

石 仏 散 歩

化粧直しされた 「右やひこ道」

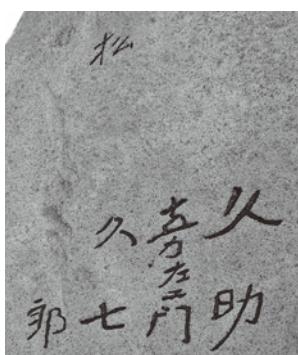
弥彦村 柏原路子

北国街道旧巻町松野尾（現新潟市西蒲区松野尾）にある道標が、この秋化粧直しされ、刻まれた文字にも墨を入れられ、道行く人々の目を引きつけている。

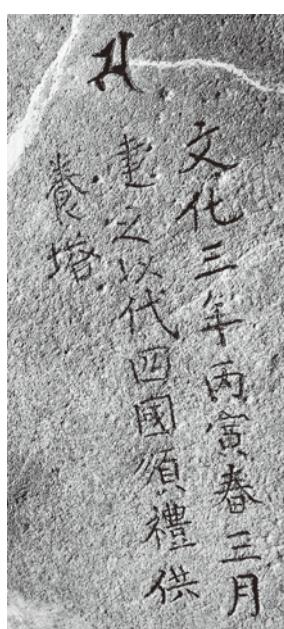
今年九月中旬に碑を見に行つたところ、その碑は跡形もなくなっていた。作業員が一人地均しをしていたので、道標の行方を尋ねたところ、「碑を建直すため、掘り起こして石材店に運んだ」という。その後、石工の親方が来られて、「石碑は、初めここに建てられたが、道路改修などで三度ほど動かされたあと、また元の場所に戻ってきた。その折きちんと修復すればよかつたのに、そのまま建てたから、亀裂が入つたりして、このままではいずれ崩壊すると管理者に伝えた。今回、建立した方のご子孫が、保存のため資金を出して建直すことになった」と話された。十一月までには完成する予定だという。

私が以前見た時は、表の文字は読めたが、造立年月と由緒は何か推定できたものの、造立者が刻まれていることはわからなかつた。

どのような修復がなされたか不明であるが、十一月八日付新潟日報に再建された記事が載つたので、同月十七日開催の「石仏フォーラム」で会員の皆さんに新聞記事とともに紹介した。



造立者名（裏銘）



四国順礼供養塔（裏銘）



化粧直しした弥彦道標



胞姫神社奉納の千体人形額



ねまり地蔵

次に訪れたのは胞姫神社。胞姫神社は源義経の妻、北の方が嫡男を生んだときの胞衣伝承に起きたある、安産・子育て信仰の神社である。奉納品として飾っていた

からは、佐渡の金銀を運ぶ道を知ることができた。

まず向かったのは柏崎市立博物館。常設展をリニューアルしたことでの米山信仰について渡邊さんの解説でじっくりと味わつた。また、北国街道についての絵地図を見ながら解説を聞き、上人の安寧塔に見送られた。

数年ぶりに参加させていただいた石仏の見学会。今回の見学の一つであるねまり地蔵は、いつか实物を見てみたいと思つていたので特に楽しみだった。

北国街道の石仏と 名所を歩く ——中越地区見学会報告——

見附市 富沢和美

「千体人形奉納額」は、ある産婆さんが取り上げた子ども達が無事に成人するよう祈願したもので、手製の人形額からあたたかい想いが感じられた。

その後、北国街道を下り、牛頭天王の石塔に見送られながら当時の難所「六割坂」を歩く。坂から見える青海駅と海の景色が素敵だ。昼食をとり、車窓から数多の石仏を鑑賞し、番神堂へ。日蓮上人の受難の絵図を見ながら解説を聞き、上人の安寧塔にかける強い思いに身が引き締まる。引き締まつたら緩むのが人の性で、番神堂の傍らにある神社の狛犬のかわいらしさにはつい頬が緩んでしまった。

最後に、事務局の皆様や見学のために尽力してくださった皆様に感謝申し上げます。

とても学びの多い見学会となつた。そして、柏崎の街中まで戻り、ねまり地蔵に会いに行く。江戸時代では、砂地に埋もれた二体の地蔵の背の高さから、今のねまり地蔵を「立ち地蔵」、立ち地蔵を「ねまり地蔵」と呼んでいたことを知つた。道が整備され、両地蔵の眞のお姿が分かつた



閻魔堂前にて

ときに呼び名を変えたそうだ。長い間人々を見守ってきたねまり地蔵、素朴で豪快だが、あたたかさも感じられた。

最後に円光寺閻魔堂へ。街の人からは「えんま市のお堂」として親しまれている。

上州の山岳靈場と 道祖神の里を歩く

——泊有志見学会報告——

長岡市 加 藤 賢治



妙義神社参道にて

道祖神の里に心ときめかせ、九月十六・十七日の有志一泊見学会に参加した。皮切りは日本三奇勝の一つ妙義山の中腹にある妙義神社参拝。最大斜度は？見上げるばかりの百六十五段の石の参道を大きく息を

継ぎながら登頂し、道中の安全と家内安寧を祈願した。本殿は全国的にも稀な黒漆塗り権現造りの莊厳な佇まい。日光東照宮の彫刻師作とも伝わる、美しく見事な彫刻が随所に施されていた。

参拝で空腹のお昼、おぎのや横川店で「だるま御膳」を満喫。そして道祖神の宝庫といわれる倉渕町（旧倉渕村）へ。一村にして七十六ヶ所、百十三基の道祖神が在り、肩を組んだり抱擁したり、その姿態は多様性に富む。この地域はかつて中山道の脇往還として信州との物資輸送の重要路で、草津の湯治客や北信濃の大名参勤交代などでも賑わった。山村の峠や集落の境界に悪霊邪氣の侵入を防ぎ、五穀豊穣と子孫繁栄をもたらし、道と旅人の安全を守る神として道祖神信仰が深く根付いた。県内最古（寛永）の像を始めとして、宝暦から天保の全盛期を経て明治、大正と時代分布が広いことでも有名。一番手は下夕村の道祖神。横一列に像容の鮮明な五基が立ち並ぶ姿に感動し無心にカメラを向けた。下諏訪神社で高遠石工の作か、優雅で気品に満ちた双体像に魅入った。浅間神社では身の丈を超える角柱四面に、ユーモラスな青面金剛がビックシリ刻まれた一石百庚申に圧倒された。長井の道祖神は滑り易く狭小な斜面に在り、



倉渕・下落合の抱擁道祖神

皆で助け合いながらアーチな御高祖頭巾を被つた双体像などを無事に見学。モダンな石造りの「はまゆう山荘」にて、温泉で疲れを癒し豪勢な夕食に舌鼓を打つた。

翌日、初秋の陽光を浴びながら「水沼コース」の種々の石仮散策を楽しむ。落合では数多ある道祖神の中でもエース級と称され、浮世絵を想わせる夫婦和合像を少々上気し、角度を変えてシャッターを何度も切った。他には線彫りの不動明王や陰陽石など色々。次に上州が誇るパワースポット！榛名神社へ。樹齢二百年を超える大杉が林立する参道を上り、靈験あらたかなる強烈パワーを頂戴した。

元祖・田丸屋の水沢うどんを醤油と胡麻だれの二種のツユで「布袋様福膳」を賞味した後、フイナーレの水沢観音を詣でた。心もお腹も満タンに！楽しく濃厚な見学会を深謝し、報告と致します。

事務局だより



◆石仏フォーラムを開催しました

十一月十七日（日）、新潟県立生涯学習推進センターにて第二十三回石仏フォーラムが開催され、四十三名（一般六名含む）の参加でした。以下、概要を報告します。

第一部の調査研究報告では①大楽和正氏の「石と砂—盆の精霊迎えをめぐって」、②荒井昭氏「四たびに及ぶ『庚申塔』の移転を追う」、③堀内正子氏「上州の山岳靈場と道祖神の里——泊有志見学会報告」の報告がありました。

大楽氏は長岡市両高地区（旧和島村）で

精霊迎えの際にジョウグチ（屋敷入口）に設ける方形状の砂壇に関する報告でした。

砂壇には花や蠟燭、線香が立てられ、墓からのお迎え火が点されます。火は最終的には屋内の精霊棚へ移動しますが、その前段階の施設と言えます。同様の習俗は神奈川県平塚市の「砂盛り」として知られていますが、本県では初めての発見報告であり、今後の研究の進展が期待されます。

荒井氏は大正期から二度の移転を経験した長岡市東神田の庚申塔が、近年さらに二

回の移転を余儀なくされた経緯について報告されました。日頃から調査結果を冊子にまとめて協力者に提供する氏の姿勢が、この移転情報を入手する契機となつたわけで、聞き書き調査に関わる者として学ぶべきところ大でした。

堀内氏は九月十六・十七日実施の一泊見学会のエッセンスを参加者代表として報告されました。上州の石仏や靈場と触れ合った感動、食事の紹介、一泊ならではの旅の楽しさをエピソードを交えて語り、今後も大勢の参加を呼びかけられました。

第二部は公開講演会では「布が語る佐渡の暮らし—金銀山の歴史とともに—」と題し、柳平則子氏（元相川郷土博物館長）よりご講演頂きました。

裂織りはじめ佐渡の織物研究で知られる氏は、地域博物館学芸員として関係資料を調査蒐集し、その成果は昭和五十一年に国指定「佐渡海府の紡織用具と製品」として結実します。以来、製品の保存だけでなく技術の継承を目指した「相川技術伝承展示館」での活動を通じて多くの織り手を育成されました。ゾンザ（刺子）やツヅレ（裂織り）などの様々な「布」を通して、金銀山を背景にした歴史風土やそこで展開する庶民の暮らしぶりが一つまた一つと浮かび

上がつきました。最後の「布の一生・人一生」では布と庶民との深く親密な関係を示され、改めて「日本の布文化」の水準の高さを認識しました。

第三部の情報交換では、やまだ漫歩氏より上越地区の三〇周年記念事業の取り組みについて、柏原路子氏から弥彦道標の化粧直しについての報告があり、閉会となりました。



柳平則子氏（上）、荒井昭氏

編集後記



早いもので令和初年も暮れていきます。本年最後の会報をお届けします。しばらくは冬籠り。来春の雪消えを待つて、再始動です。では皆様、よいお年をお迎え下さい。

（中越事務局）